

2020. 12. 27 (日) マラキ 1 : 1 ~ 14

1:1 宣告。マラキを通してイスラエルに臨んだ**主**のことば。

1:2 「わたしはあなたがたを愛している。

——**主**は言われる——しかし、あなたがたは言う。『どのように、あなたは私たちを愛してくださったのですか』と。エサウはヤコブの兄ではなかったか。

——**主**のことば——しかし、わたしはヤコブを愛した。

1:3 わたしはエサウを憎み、彼の山を荒れ果てた地とし、彼の相続地を荒野のジャッカルのものとした。

1:4 たとえエドムが、『私たちは打ち砕かれたが、廃墟を建て直そう』と言っても、

——万軍の**主**はこう言われる——彼らが建てても、わたしが壊す。彼らは悪の領地と呼ばれ、**主**がとこしえに憤りを向ける民と呼ばれる。

1:5 あなたがたの目はこれを見る。そして、あなたがたは言う。『**主**は、イスラエルの地境を越えて、なお大いなる方だ』と。』

1:6 「子は父を、しもべはその主人を敬う。しかし、もし、わたしが父であるなら、どこに、わたしへの尊敬があるのか。もし、わたしが主人であるなら、どこに、わたしへの恐れがあるのか。

——万軍の**主**は言われる——あなたがたのことだ。わたしの名を蔑む祭司たち。しかし、あなたがたは言う。『どのようにして、あなたの名を蔑みましたか』と。

1:7 あなたがたは、わたしの祭壇に汚れたパンを献げていながら、『どのようにして、私たちがあなたを汚しましたか』と言う。『**主**の食卓は蔑まれてもよい』とあなたがたは思っている。

1:8 あなたがたは盲目の動物を献げるが、それは悪いことではないのか。足の萎えたものや病気のものや献げるのは、悪いことではないのか。さあ、あなたの総督のところを差し出してみよ。彼はあなたを受け入れるだろうか。あなたに好意を示すだろうか。

——万軍の**主**は言われる——

1:9 さあ、今度は神に嘆願したらどうか。『われわれをあわれんでください』と。このことはあなたがたの手によることだ。神があなたがたのうち、だれかを受け入れるだろうか。

——万軍の**主**は言われる——

1:10 あなたがたのうちには、扉を閉じて、わたしの祭壇にいたずらに火をともしないようにする人が、一人でもいるであろうか。わたしはあなたがたを喜ばない。

——万軍の**主**は言われる——わたしは、あなたがたの手からのささげ物を受け入れない。

1:11 日の昇るところから日の沈むところまで、わたしの名は国々の間で偉大であり、すべての場所で、わたしの名のためにきよいささげ物が献げられ、香がたかれる。まことに、国々の間で偉大なのは、わたしの名。

——万軍の**主**は言われる——

1:12 しかし、あなたがたは『**主**の食卓は汚れている。その果実も食物も蔑まれている』と言って、わたしの名を汚している。

1:13 また、『見よ、なんと煩わしいことか』と言って、それに蔑みのことばを吐いている。

——万軍の**主**は言われる——

あなたがたは、かすめたもの、足の萎えたもの、病気のを連れて来て、ささげ物として献げている。わたしが、それをあなたがたの手から取って、受け入れるだろうか。

——主は言われる——

1:14 自分の群れのうちに雄がいて、これを献げると誓いながら、損傷のあるものを主に献げるような、ずるい者はのろわれる。わたしは大いなる王であり、

——万軍の主は言われる——

わたしの名は諸国の民の間で恐れられているからだ。」

#### <説教>

先主日のクリスマス礼拝で、マラキ書の最後の章4章の前半（1～3節）から、降誕のイエス・キリスト—義の太陽—のことを学びました。

マラキ書は短い書なので、1章に戻って初めから、やはり降誕のキリストに目を向けて学びたいと願います。

主なる神は、〈マラキを通してイスラエルに〉〈宣告〉なさいました。(1)

この〈イスラエル〉は、直接にはバビロン捕囚された地からエルサレムに帰って来たユダヤ人たちのことです。

〈主のことば〉による最初の宣告は、「わたしはあなたがたを愛している。」(2)でした。

この後すぐに分かることですが、このときのイスラエルの民は、自分たちに対する神の愛を疑い、不信仰と不従順に陥り、神を侮り、神を見失い、真面目に神の律法を守り神に仕えても無駄で何の得にもならないと失望し、なげやりになっていました。

神も人も愛さず、神と人に対して罪を犯していました。

そんなイスラエルの民に対して、神は彼らの「主人」また「父」(6)として、また「大いなる王」(14)として「わたしはあなたがたを愛している。」と言い渡すのでした。

初めからそうだったのですが、神が預言者をイスラエルの民に遣わし、預言者を通して彼らに〈主のことば〉をお語りになるのは、神が彼らを愛しているからにはほかなりません。

〈主のことば〉によって彼らが自らの罪深さを思い知り、神にあわれみを求め、神に立ち帰るように、神に従い神とともに歩むように、彼らが罪の故に滅びることがないように、彼らを愛している神はご自分の預言者をお立てになってお語りになるのです。

さてしかし、そんな神の深く限りない愛を知らず、疑い、信じない民は食ってかかるように神に言うのでした。

「どのように、あなたは私たちを愛してくださったのですか」と。(2)

神はお答えになります。

「エサウはヤコブの兄ではなかったか。——主のことば——しかし、わたしはヤコブを愛した。」(2)と(5節まで)。

このヤコブ(まさにイスラエル)とエサウ兄弟に神がなされたことが、「あわれんでくださる神」(ローマ9:16)の愛を端的に示していると言われるのです。

神がヤコブを愛したのはヤコブがエサウよりも何か優れて良いところがあった(性格であれ、行いであれ、道徳的にであれ)からではありませんでした。

確かにエサウは〈淫らな者、俗悪な者〉と言われ、彼のようになるなと言われてはいます(ヘブル12:16)。

しかしだからと言ってヤコブがどれほど清廉潔白だったかと言えば、とてもそんなことはなく、それこそ〈狡猾〉であり〈嘘つき〉〈人をだます者〉でした。

つまりはヤコブもエサウも神の目にはどちらも罪深かったのです。

しかし神は彼らが〈まだ生まれもせず、善も悪も行わないうちに〉(ローマ 9:11)、ご自身の全く善いみこころによってヤコブを選んで、ヤコブを特別に愛されたのです。

そしてエサウから命からがら逃げる途中のヤコブにベテルでご自身を現し、ご自身を知らせ、ご自身の愛を表してもくださいました。

自身の約束のみことばに忠実に、ヤコブの子孫、イスラエルの民を神はあわれみ、モーセ(彼もまた預言者でもありました)を通してエジプトの奴隷から解放してくださいました。

そのように神が特別に愛し、あわれんでくださり、御翼のかげに保護し、運び働いてくださらなければとてもじゃないが救われることなく滅びるほかなかったのが、ヤコブ(イスラエル)、神の選びの民の本当の姿です。

そんな神の愛に感謝して、喜んで、では自分たちも神を愛し、神を信じ、神に従い、神を礼拝し、神の前に悔い改め、神に献身して、神が自分たちにしてくださったように自分たちも人を愛して生きるように、そうやって神の栄光を現して生きるように神はご自分の民にお命じになり、期待なされたのです。

そういう信仰生活の基準が、モーセを通して神がお与えになった十戒であり、律法でした。

ところがそれからおよそ 1,000 年後、当時のイスラエルの民もまた神の特別な愛に応答せず、神の期待を裏切り、神を愛することなく、いわば神の恩を仇(あだ)で返していたのです。

「子は父を、しもべはその主人を敬う。しかし、もし、わたしが父であるなら、どこに、わたしへの尊敬があるのか。もし、わたしが主人であるなら、どこに、わたしへの恐れがあるのか。——万軍の主は言われる——あなたがたのことだ。わたしの名を蔑む祭司たち。」(6)と神は続けて指摘なさいました。

なるほど彼らは口では神を「主」と呼び、また「父」と呼んでいました。

しかし、その心には神に対する〈尊敬〉も〈恐れ〉もなく、あるのは神への〈蔑み〉(6,7,12,13) —神を軽んじ、侮り、見下げている—だけだ、と神は看破なされたのです。

しかしそう言われるとイスラエルの民は神に「どのようにして、あなたの名を蔑みましたか」とまた食ってかかります。

それで神は、あなたがたの心はあなたがたの「ささげ物」にそれはもうはっきりと表されていると言われました。

なるほど当時はエルサレム神殿は再建され、そこに民は神へのささげ物を持って来て、献げ、神を礼拝していました。

しかし彼らが持って来て献げていた物は、それはそれは酷い物であることを神は指摘なされたのです(7-14)。

彼らが「それが何か？」と何食わぬ顔で献げていた物は、〈汚れたパン(余りものの古いカビの生えたようなパンのことか、献げ物の〈動物〉のことか)〉(7)、〈盲目の動物〉〈足の萎えたものや病気のもの〉(8,13)、〈かすめたもの(他人からだまし取ったもの、

奪い取ったもの、あるいは他の動物がそれを食べようとして殺したもの) (13)、〈損傷のあるもの〉(14)でした。

本当に神を〈父〉として「重んじ」(〈尊敬〉と訳された語の本来の意味)、〈主〉として〈恐れ〉るなら、また神を愛し、神を第一としているなら、まず最初に一番良いものを取り分けて神に献げてから、その後に残ったものを自分たちが食べ、生活するというのが信仰者の筋(すじ)というものです(「まず全収入の十分の一を」とはそういう道理でもあります)。

なのにイスラエルの民はその真逆でした。

まず自分たちのために良い物を確保しておいてから、その後で余ったもの、古くなった〈汚れたパン〉、自分たちは食べたくないような、または売り物にならないような「盲目の動物」〈足の萎えたものや病気のもの〉を平気で献げていました。

自分たちを捕囚の地から帰還させてくれた宗主国ペルシアの行政長官〈総督〉(8)のような権力者に気に入ってもらおうとあれこれと考えて高価な贈り物はするくせに、もし総督に〈差し出し〉たとしたら総督の怒りを買うようなものを神に献げていながら、それを〈悪いこと〉とは考えていませんでした(8)。

そして、そんなものを神殿にいて平気で人々から受け取り、〈祭壇〉、〈主の食卓(祭壇のこと)〉で神に献げるような〈祭司〉も祭司でした(6-7)。

本来なら神へのささげ物について民に正しくきちんと教えるのも〈祭司〉の務めなのに、その務め責任を放棄して民に妥協して、民と一緒にあって神を侮り軽んじている〈祭司〉を民の代表として神は責め、その責任を問われるのでした(6)。

いっそのことそんな悪いささげ物を献げさせないように神殿の〈扉を閉じて、わたしの祭壇にいたずらに火をともしないようにする人が、一人でもいるであろうか〉(10)、いやいやない。

そんな祭司や民が「われわれをあわれんでください」と〈神に嘆願した〉ところで、〈神があなたがたのうち、だれかを受け入れるだろうか〉(9)、いやだれをも受け入れない。

そんな悪いささげ物を〈わたしが、それをあなたがたの手から取って、受け入れるだろうか〉(13)、いや受け入れはしない。(10節も)

当時遠くに離散していたユダヤ人を通して「改宗者」となった異国人のほうむしろ正しく神を知って正しいささげ物をして、正しく神を崇め礼拝を捧げていたことがあったようです(11)。

それなのに、“本家”のはずのイスラエルの民は神へのささげ物をいいかげんに考え、神を侮り軽んじ、神の名を汚して平気でいたのです。(12)

そして神のことばなど〈煩わしい〉(13)、律法の規定など〈煩わしい〉、そんなものに従ってささげ物を献げ、神を礼拝するなど〈煩わしい〉、自分たちの都合に合わせて、自分たちのやりたいようにするのが〈煩わし〉くなく、楽だしそれでいいと考えていたのでしょう。

その時その時の自分の都合が一番ですから、何か困ったことがあって神に嘆願するのに最初は律法の規定どおりに〈自分の群れのうち〉の〈雄〉を〈献げると誓いながら〉、いざ献げる段になるとやっぱり惜しくなって〈損傷のあるものを主に献げる〉ような〈ずるい者〉もいましたが、そういう者は〈のろわれる〉とまで神は言われるのです。

このように、神を愛することなく、自分勝手に、恩知らずで心頑で、罪深いイスラエルの民をも神はなおも愛してくださり、ご自分のひとり子をキリスト・イエスとしてこの世に遣わし、与えてくださいました。

神を見失い、神の愛を正しく知らず、それ故神を愛さず、神にささげるべき一番良いものを献げず、悪い物しか献げられない人々（イスラエルの民）のところに神が人となって来てくださったのです。

ひとり子の神イエス・キリストが、神を説き明かされるのです。（ヨハネ 1:18）

イエスを知る人は神を知り（ヨハネ 14:7）、イエスを見た人は神を見た（同 14:9）のです。

「神が私たちとともにおられる」という意味の「インマヌエル」と呼ばれる（マタイ 1:23）イエス・キリストによって、私たち罪深い者とともに神がいてくださることを私たちは知ります。

キリストが自ら十字架の上で私たちの罪をその身に負われ（I ペテロ 2:24）、十字架の死にまで従われ（ピリピ 2:8）、全く罪汚れのない清いご自身をいけにえとして私たちのために神にお献げになって私たちの罪を贖ってくださったことを知って、私たちは神に愛されており、神のあわれみを受けたことを知ります。

それほどまでに神に愛され、神のあわれみを受けたことを知り、信じる者—私たち—は、今までいい加減なささげ物をしていたことを、神を侮り軽んじていたことを悔い改め、その罪をイエス・キリストの故に赦された神への感謝と喜びをもって自分自身のからだを神に喜ばれる聖なる生きたささげ物としてささげて神を礼拝し、神に祈るようになるのです（cf.ローマ 12:1）。

〈日の昇るところから日の沈むところまで、わたしの名は国々の間で偉大であり、すべての場所で、わたしの名のためにきよいささげ物が献げられ、香がたかれる。まことに、国々の間で偉大なのは、わたしの名。〉（マラキ 1:11）とのマラキの預言はこうしてイエス・キリストによって成就したのです。

「どのように、あなたは私たちを愛してくださったのですか」（1:2）という民の反問に対する答えは、「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。」（ヨハネ 3:16）ということです。